

## 児童婚の根絶を

Ms. Yojana POKHAREL (ネパール)

ネパールでは、児童婚は 1963 年から違法となっていますが、実際にはいまだに廃止されていません。その主な原因となっているのが、教育機会の欠如、児童労働、社会的圧力、花嫁の持参金の慣習、家庭内での女兒に対する差別などです。ユニセフ（国連児童基金）によると、ネパールにおける児童婚の割合はアジアで 3 番目に高く、女子の 40%以上が 18 歳未満で、10%が 15 歳未満で結婚しています。しかし、ネパールの法律では最低結婚年齢は男女とも 20 歳と定められています。

ネパール政府はこの慣習を撲滅するために一定の取り組みを行ってはいるものの、長らく約束されてきた国家計画の達成は先延ばしになっています。2014 年、イギリス・ロンドンで開催された国際会議「ガール・サミット」において、ネパールの「女性・子供・社会福祉大臣」は、2020 年までに児童婚根絶に向けて努力することを誓約しました。そして、ネパール政府は 2016 年 3 月にカトマンズにおいて国内の「ガール・サミット」を独自に開催しましたが、それまでに児童婚根絶の目標達成期限を 2030 年までに延長しました。これは国連の持続可能な開発目標 (SDGs) の達成期限と同じ年です。

この問題に詳しい専門家は、政府による児童婚撲滅に向けた取り組みは十分ではないと言います。児童婚の防止や、児童婚させられた子どもが受ける被害の軽減のために、政府が効果的な施策を実施した形跡がほとんど見られないということです。

児童婚が常態化しているネパールの農村地域ですが、その事情は少し複雑です。たとえば、幼い娘を結婚させる親の多くは児童婚が違法だという事実を知らず、また特に娘に教育を受けさせることに価値を認めていません。こうした背景から、女兒は幼くして学校をやめさせられ、結婚を強いられるのです。女兒たちは、自分たちの結婚が違法だと認識していたとしても、警察などの当局に訴えることができません。また、児童婚の問題に取り組んでいる NGO のサポートを得て警察に届け出ようとしても、警察は受理しようとしません。

2015 年 4 月に起きた大地震では多くの人が命を奪われ、約 400 万人もの人たちが家を失いましたが、これにより児童婚を取り巻く状況が一段と悪化しました。多くの家庭が絶望感から、娘を嫁がせることを望んだのです。この件についての正式な調査は行われていませんが、多くの被災した家庭は同じような体験をしています。

児童婚は様々な負の結果をもたらします。具体的には、教育の機会が奪われ、若年妊娠が原因で死亡をはじめとする深刻な健康被害を引き起こし、身体的・性的暴力などの家庭内暴力を受け、見捨てられてしまう、というような事態に陥るのです。世界銀行と国際女性研究センター (ICRW) による報告は、児童婚によって途上国に 2030 年までに何兆ドルもの損害をもたらされる可能性を指摘しています。また、幼い少女が結婚後に妊娠した場合、生殖器官が未成熟なために子宮脱や産科フィスチュラ（産科 瘻孔）になりやすい傾向があります。さらに、児童婚をした女子は家庭内暴力や精神的トラウマに苦しむリスクが高まります。

これに対し、児童婚を根絶することは、女子とその子どもたちが学業を修めるのにプラスの影響を与え、女性がきちんと大人になってからより少ない人数の子どもを持つことを促し、女性の収入の増加と家庭の幸福をもたらします。たとえば、ネパールでは出生率を下げることで得られる利益は、約 10 億ドルにのぼるとされています。

## 前向きな変化は起きている

「女性・子供・社会福祉省」当局者の話では、結婚できる法定年齢は男女ともに 20 歳以上と定められていますが、この法律にいくつかの改正があったそうです。現行法に違反すると、懲役 3 年と約 95 ドルの罰金に処せられます。しかし、政府による児童婚の撲滅を目指した政策としては、この罰則では実効性に乏しいと、専門家は指摘しています。

とはいえ、事態は良い方向へと動き出しています。2001 年に実施されたネパール保健人口調査では、15～19 歳の少女の 40%が既婚となっていますが、後に行われた同様の調査において、2006 年は 32.2%、2011 年は 28.8%にまで減少しています。これは好ましい傾向です。そして時間はかかるけれど変化は起きるのだと、私たちに確信させてくれます。国連人口基金は、教育こそが児童婚を減らす最善の方法だと考えています。しかし、依然として課題もあります。それは女子生徒の中退率が高いという事実で、中退した女子が結婚する可能性は 10 倍にもものぼるのが現状です。



14 歳で結婚し、子どもを 3 人産んだニブナナ・ハトゥンさん



15 歳で結婚したサヒラ・マリクさん